

2018 年度版

剽窃（ひょうせつ）の防止と資料の利用についての手引き

高知大学人文学部 社会経済学科 教務委員会（編）

この手引きは、国際社会コミュニケーション学科教務委員会が
2010 年度に発行した手引きをもとに作られています。

はじめに：この手引きの目的と内容

この「剽窃（ひょうせつ）の防止と資料の利用についての手引き」（以下「手引き」と省略）は、これから学生の皆さんが、プレゼンテーションの準備、レポートや卒業論文の作成に取り組む際に、注意しなければならない点についてまとめて説明するものです。

学生の皆さんがプレゼンテーションを行うとき、レポートを作成するとき、また卒業論文を執筆するときには、皆さん自身の責任で**絶対に避けなければならないことがあります**。それは「**剽窃**」と呼ばれる行為です。剽窃とは「**他人の作成した内容を、自分が作成したかのように使用すること**」であり、もし剽窃を行えば**厳しいペナルティが課されます**。その中で特に注意しなければならないのは「**意図せざる剽窃**」です。これは、**皆さん自身には剽窃を行うつもりは無かったにもかかわらず、剽窃と判定され、ペナルティを課されるケース**です。この「手引き」では、まず剽窃とは何か、なぜ許されないのか、どのようなペナルティが課されるのか、何をしたら剽窃と見なされるのか、について説明します（→1. 剽窃とは何か）。

では、プレゼンテーションやレポート、卒業論文の中で、皆さん自身が**剽窃を避けるためには何をすればよいか**。剽窃を避けるためには、他の人が作成した資料を利用する際に、「**資料の利用のルール**」に従って書くということが必要になります。プレゼンテーションでもレポートでも、まして卒業論文であればなおのこと、他の人が作成した資料（図書、論文、音楽、映像、…etc.）を利用することは不可欠です。しかしその場合には、**誰のどんな資料のどの部分を利用したかを一定のルールに従って明示する必要があり、もしもルール通りに明示できなかった場合には「剽窃を行った」と見なされる危険が生じます**。そこでこの「手引き」では、皆さんに剽窃を回避する術を身につけてもらうために、資料の利用のルールについて説明します（→2. 資料の利用のルール）

ここまでは絶対守らなければならないルールの説明ですが、資料の利用については、**内容の面で注意が必要な点**もあります。それは「**資料の種類と信頼性**」です。皆さんは、プレゼンテーションやレポート、卒業論文の中で、自分の主張や結論について説明し、根拠を示すために資料を利用することになります。しかし、通常皆さんが利用する出版物やウェブ上の情報の中には、資料としての信頼性を十分に持たないものもあります。もし皆さんが**利用した資料が信頼性に欠けるものだった場合**、それらを根拠とする皆さん自身の主張や結論も信頼性に欠けるものと見なされ、最終的には皆さんの**プレゼンテーション、レポート、卒業論文自体が信頼性に欠けるものと判定される**場合があります。したがって資料を利用する際には、その**資料の種類と信頼性を皆さん自身が見分ける必要**があります。そこでこの「手引き」では、資料の種類と信頼性について説明します（→3. 資料の種類と信頼性）。



1. 剽窃（ひょうせつ）とは何か

1-1) 剽窃とは何か？

剽窃とは、一言で言えば「**他人が作成した内容を、自分が作成したものであるかのように使用すること**」です。よくある例はウェブ上の文章をコピー・アンド・ペーストしてレポートや論文として提出することですが、剽窃と見なされるのはこの例だけではありません。新聞・単行本・論文などの出版物や、小説、演劇、美術作品など、**何であれ「他人が作成したもの」を「自分が作成したものであるかのように」使用したら「剽窃」と見なされます**。

1-2) なぜ剽窃は許されないのか？

剽窃は、「虚偽」であり、「不正／侮辱」であり、「窃盗」でもあります¹。

剽窃は読み手を欺くことです。また、もしもあなたがレポートや卒業論文で剽窃を行ったとしたら、自分自身で真剣に課題に取り組んだ他の学生に対して「不正な手段で利益を得て、彼らを侮辱した」こととなります²。同時にあなたは、本来の著者に対して、自分が著者であるかのように装うことで「盗みを働く」こととなります³。手短かに言えば、剽窃は、その他の不正行為や窃盗と同様に、犯罪行為です。

1-3) 剽窃をするとどうなるのか？

剽窃を行ったことが判明した場合には、重大なペナルティが与えられます。高知大学の場合、剽窃を行った学生については、剽窃が判明した科目だけでなく、その学期に終了する全ての授業科目が0点として処理されます⁴。

1-4) 何をしたら（何をしなかったら）剽窃と見なされるのか？

剽窃には様々な形があります。学生から見れば「それも剽窃になるの？」と思うような事例もあります。ですから「意図せざる剽窃」に注意してください——書いた本人にそのつもりが全く無くても、「剽窃を明確に回避する書き方」をしなければ剽窃に該当してしまうことがあるからです⁵。したがってあなたは、「剽窃を避けるにはどのように書けばよいか」を理解し、身につけ、実行しなければなりません。

では剽窃を回避するにはどうすればよいか。剽窃を回避するポイントは、他人の資料を利用する際、「それが他人の資料であること」をはっきりと示し、また「誰の」「どんな資料の」「どの部分」を利用しているかを、一定のルールに従って明らかにすることです⁶。それでは、その「一定のルール」とは何でしょうか？ 次の「2. 資料の利用のルール」で説明しましょう。



2. 資料の利用のルール

2-1) 資料の利用の基本ルール

他人の作成した資料の内容を自分のレポートや論文の中で利用する場合には、「引用」または「言い換え」の形式を使ってどこからどこまでが他人の文章を利用した部分であることを明示しなければなりません。また、引用・言い換えを行った箇所の直後に「出典表示」を行って利用した内容が誰のどんな資料のどの部分なのかを明示しなければなりません。さらに、レポート・論文の末尾には、「参考文献表」を付けて自分が利用した資料を全て明示しなければなりません。なお、引用の細かいルールは学問分野によって異なりますので、

¹ Earl Babbie, “Plagiarism” (<http://www1.chapman.edu/~babbie/plag01.htm>, 2018年6月20日参照)。

² *Ibid.*

³ 著作権法は、引用の際の権利義務について、次のように規定しています。まず、「公表された著作物は、引用して利用することができる。この場合において、その引用は、公正な慣行に合致するものであり、かつ、報道、批評、研究その他の引用の目的上正当な範囲内で行なわれるものでなければならない」(32条1項。ベルヌ条約10条1項も同旨)。また、引用を行う場合には、「当該各号に規定する著作物の出所を、その複製又は利用の態様に応じ合理的と認められる方法及び程度により、明示しなければならない」(48条1項1号)。出所表示義務違反者は、「五十万円以下の罰金に処」せられる(122条)。

⁴ 高知大学では、レポート等の作成にかかわる不正行為(流用・剽窃)を行った場合、「学生の当該学期に履修する全授業科目の成績は、原則として無効とし、0点として処理する。通年科目、集中講義科目、卒業論文や学内外の実習(教育実習等)等も含めた全授業科目が無効の対象となる」と定められています(高知大学『平成30年度学生便覧』、p.21)。「盗用」とは、この手引きで言う「剽窃」に当たります。

⁵ Earl Babbie, “Plagiarism” (<http://www1.chapman.edu/~babbie/plag02.htm>, 2018年6月20日参照)。

⁶ Earl Babbie, “Plagiarism” (<http://www1.chapman.edu/~babbie/plag06.htm>, 2018年6月20日参照)。

指導教員の指示に従って下さい。

2-2) 「引用」(quotation)のルール

引用とは、元の資料の文章を改変することなく自分のレポート・論文の文章の中で利用することをいいます。引用を行う場合には、**利用したい資料の文章を「」(かぎ括弧)でくくるなどの方法により、自分自身の文章と区別して使用**しなければなりません⁷。

たとえば次の文章を利用したい場合：

経済学を意識することなく、日常生活を送ることはできます。でも、経済学とまったく無関係に日常生活をおくることはできません。それは、今日の経済政策が経済学を利用して立案されているからであり、ぼくらの日常生活が経済的な営みを含んでいる限り経済政策の影響を受けざるをえないからです。だから、アマチュアであっても、日常生活をよりよいものにするには、ある程度の経済学の知識が必要です。
(小田中直樹が2003年に勁草書房から出版した『ライブ・経済学の歴史』の3ページにある文章)

引用の基本例：

小田中直樹は、経済学を学ぶ意味について次のように主張している。「**経済学を意識することなく、日常生活を送ることはできません。でも、経済学とまったく無関係に日常生活を送ることはできません**」(小田中2003、3)。このレポートでは、小田中のこのような主張について…

引用の応用例：長い文章を、自分の文章と区別して引用する

→方法：「ブロック・クォーテーション」という形式を使います。代表的なやり方は、引用した部分の前後を一行ずつ空け、引用部分全体を二字下げることによって区別するというものです(ただし、これ以外にも幾つかの方法があるので注意して下さい)。

小田中直樹は、経済学を学ぶ意味とその理由について、次のように説明している。

経済学を意識することなく、日常生活を送ることはできます。でも、経済学とまったく無関係に日常生活をおくることはできません。それは、今日の経済政策が経済学を利用して立案されているからであり、ぼくらの日常生活が経済的な営みを含んでいる限り経済政策の影響を受けざるをえないからです。だから、アマチュアであっても、日常生活をよりよいものにするには、ある程度の経済学の知識が必要です(小田中2003、3)。

小田中のこのような説明について、このレポートでは…

他人の資料から引用した部分を、かぎ括弧「」やブロック・クォーテーションなどの方法によって明示することができなかった場合には、剽窃と見なされる可能性があります。

2-3) 「言い換え」(paraphrase)のルール

言い換えとは、元の資料の内容を、自分の言葉でまとめなおして利用することをいいます。言い換えを行う場合には、**資料の内容をまとめている部分がどこなのかを自分の言葉で明示**しなければなりません。また、**内容のまとめは原文の言葉のままであってははいけません**。その場合、利用したい部分を原文と違う言葉で自分なりにまとめるか、「」を使って引用の形に変更するか、どちらかの修正が必要になります。

利用したい文章の例：

経済学を意識することなく、日常生活を送ることはできます。でも、経済学とまったく無関係に日常生活をおくることはできません。それは、今日の経済政策が経済学を利用して立案されているからであり、ぼくらの日常生活が経済的な営みを含んでいる限り経済政策の影響を受けざるをえないからです。だから、アマチュアであっても、日常生活をよりよいものにするには、ある程度の経済学の知識が必要です。
(小田中直樹が2003年に勁草書房から出版した『ライブ・経済学の歴史』の3ページにある文章)

⁷ 「引用」「言い換え」、および「出典表示」項目Aで示した方法については、マニユエラ・モスカ、マリア・パガネッリ、森直人「経済思想史における論文の書き方」(<http://manuelamosca.com/Tesi/jap.pdf>、2018年6月20日参照) 16-21ページを参考にしています。

言い換えの基本例：

小田中直樹によれば、経済学が経済政策と関連していて、経済政策が私たちの日常生活に影響を及ぼすために、経済学者でなくとも経済学を学ぶ意味はあるという（小田中 2003、3）。このレポートでは、小田中のこうした考えに基づいて…

他人の資料に基づいて「言い換え」を行った部分を、適切な表現によって明示することができなかった場合、あるいは不適切な「言い換え」を行った場合には、剽窃と見なされる可能性があります。

2-4) 「出典表示」(citation)のルール

引用・言い換えを行ったときには、その直後の箇所で、誰のどんな資料のどの部分を利用したのかを明示しなければなりません。具体的な方法は、分野によって様々なので、指導教員の指示に従って下さい。代表的な方法は次の二つです。

A) 本文中の()内に表示する方法

他の資料を利用した部分の直後に()で括って著者名 出版年、参照したページ数を記入します。その上で、その資料のより詳しい情報については「参考文献表」を使って明示します。(→2-5)「参考文献表」のルール)

具体例 (引用の場合)：

小田中直樹は、経済学を学ぶ意味について次のように主張している。「経済学を意識することなく、日常生活を送ることはできます。でも、経済学とまったく無関係に日常生活を送ることはできません」(小田中 2003、3)。このレポートでは、小田中のこのような主張について…

B) 脚注で表示する方法

他の資料を利用した部分の直後に、「脚注」を付けて、脚注の中に 著者名『書名』、出版社、出版年、参照したページ数を記入します。

具体例 (言い換えの場合)：

小田中直樹は、経済学を学ぶ意味について次のように主張している。「経済学を意識することなく、日常生活を送ることはできます。でも、経済学とまったく無関係に日常生活を送ることはできません」¹。このレポートでは、小田中のこのような主張について…

¹ 小田中直樹『ライブ・経済学の歴史』、勁草書房、2003年、p.3。

※「脚注」の付け方 (Microsoft Word2016の場合)

- ・本文中の脚注を挿入したい場所にカーソルを置き、画面上部の「リボン」の中から、[参考資料] タブをクリック
 - リボンの内容が切り替わるので、その中から [脚注の挿入] をクリック
 - 本文に脚注番号が付き、ページの一番下に脚注が付いて文章が記入できるようになります
- ・脚注の番号は、レポートの最初から順番に並ぶように、ソフトが自動的に調整します

※複数のページにまたがって引用・言いかえを行った場合のページ数の示し方

「小田中直樹『ライブ・経済学の歴史』、勁草書房、2003年、pp. ○-○。」

※直前で引用したのと同じ資料から続けて引用する場合の示し方

- ・和文の単行本の場合→「**同上書**、p. ○」
- ・和文の論文の場合→「**同上論文**、p. ○」
- ・英文資料の場合→「**Ibid.**、p. ○」

他人の資料からの引用・言い換えを行った際に、適切な出典表示を行わなかった場合には、剽窃と見なされる可能性があります。

2-5)「参考文献表」(References, Cited Works)のルール

レポート・論文の中で利用した資料については、全てその末尾に一覧表の形で示さなければなりません。参考文献表のスタイルも、分野や書き手によって様々なので、指導教員の指示に従ってください。ここでは代表的な作成方法を示します⁸。

(1) 日本語文献の示し方 (記載すべき情報の種類と記載の仕方)

- ①単行本の場合：著者名 (出版年) 『書名』、出版社名。
- ②単行本中の論文：著者名 (出版年) 「論文名」、編者名 『書名』、出版社名、掲載ページ数。
- ③雑誌論文の場合：著者名 (出版年) 「論文名」、『雑誌名』、第〇巻第×号、掲載ページ数。

(2) 外国語文献の示し方 (記載すべき情報の種類と順序)

- ①単行本の場合：著者名 (出版年) , 書名、出版社名。
- ②単行本中の論文：著者名 (出版年) , “論文名” , 編者名, ed. 書名, 出版社名、掲載ページ数。
- ③雑誌論文の場合：著者名 (出版年) , “論文名” , 雑誌名, vol. 〇, No. ×, 掲載ページ数。

(3) ウェブサイトの示し方

- ウェブサイト名 (参照したページの URL、参照年月日)

(4) 全体としての並べ方

- ・日本語文献は著者の五十音順、外国語文献は著者のアルファベット順に配列します
- ・もし同じ著者の二つ以上の文献を示す場合、出版年の順番に並べます

具体例：

参考文献

小田中直樹 (2003) 『ライブ・経済学の歴史』、勁草書房。
田中敏弘 (1989) 「ヒュームとコート対カントリ論争」、田中敏弘編『スコットランド啓蒙と経済学の形成』、日本経済評論社、pp. 53-89。
ホーコンセン、K. (坂本達哉・壽里竜訳) (2002) 「初期近代自然法の意義」、『イギリス哲学研究』、第 25 号、pp. 69-88。
Armitage, David (2000), *The Ideological Origins of the British Empire*, Cambridge University Press.
Bosbach, Franz (1998), “The European Debate on Universal Monarchy”, Armitage, David ed. *Theories of Empire 1450-1800*, Ashgate, pp. 81-98.
Susato, Ryu (2006), “Hume’s oscillating civilization theory”, *History of European Ideas*, vol. 32, Issue 3, pp. 262-277.
NIKKEI NET (<http://www.nikkei.co.jp/news/main/20081028AT5D2800I28102008.html>、2008年10月28日参照)。

レポート・論文の中で利用した資料について、十分な情報を適切に示すことができなかつた場合には、剽窃と見なされる可能性があります。



3. 資料の種類と信頼性⁹

⁸ 以下の作成方法は、戸田山和久『論文の教室』NHK出版、2002年、238-244ページに準拠しています。

⁹ この「資料の種類と信頼性」の項については、マニユエラ・モスカ、マリア・パガネリ「経済思想史における論文の

プレゼンテーションを準備し、レポートや卒業論文を作成するには、それぞれのテーマに応じて様々な資料を使う必要があります。レポートや論文の資料となりうるものは、分野によって異なりますが、図書・学術誌・論文・各種統計から、絵画・音楽・映像・ウェブ上の情報まで、幅広く様々です。ここで注意が必要なのは、**これらの資料はそれぞれ異なる信頼性を持っている**ということです。信頼性の高い資料を効果的に利用できれば、そのレポートや論文は説得力の高いものになります。逆に信頼性の低い資料に頼った論文には十分な説得力は期待できません。そこで資料を利用する際には、その**資料の種類と信頼性をあなた自身が見分ける必要**があります。

ただし、利用可能な資料の範囲、資料をどのように分類するか、またどの資料にどれだけの信頼性があるかといったことについては、分野によって違いがあります。ここでは、ごく一般的な分類と最低限の注意事項についてだけ説明するので、より詳しい内容については担当教員の指導に従ってください。

3-1) 一次資料

一次資料とは、研究や調査の主な対象となる、加工されていない内容やデータのことを言います。具体例としては、ある言語における発話や発音、文学作品、思想家の著作、政府や公的機関発行のデータや各種の統計などが挙げられます。これらはレポートや論文の調査・考察の直接の対象となるものであり、そのテキストやデータが正しく作成されたものであること（文学作品なら「定本」であるかどうか、各種の統計であれば信頼できる手法で作成されているかどうか）について確認が必要になります。

3-2) 二次資料

二次資料とは、上で説明した一次資料に基づいて（主として専門の研究者によって）作成された資料のことを言います。具体例としては、それぞれの分野の学術図書、学術誌、学術論文などが挙げられます。二次資料は、主にレポートや論文の根拠として利用されるもので、基本的な学術的な信頼性を有します。ただし、具体的な信頼性はそれぞれの研究者の議論の質によって異なることに注意が必要です。

3-3) 三次資料

三次資料とは、（多くの場合は二次資料に基づいて）不特定多数の読者に向けて書かれた一般的な解説のことを言います。具体例としては、新聞の解説記事、（専門書ではなく）一般向けの商業図書、教科書や概説書のことを言います。三次資料は、通常は特定の分野についての基本的な理解を得るために使用するものです。言い換えれば、大学でのレポートや卒業論文に関して言えば、**三次資料は主要な根拠として利用できるだけの十分な信頼性を有していません**。もしあえて三次資料を利用する場合には、それらの資料の信頼性が低いことを認識し明示した上で使用する必要があります。

3-4) ウェブ上の資料

インターネットを通じて閲覧可能な資料も数多く存在しますが、その種類も信頼性も様々です。ウェブ上の資料の一部は、上に説明した一次・二次・三次資料に分類することができ、それらの資料の信頼性も上の説明に準じます。

インターネットを通じて入手可能な一次資料としては、一部の文学作品や思想家の著作、それに多くの統計資料などが電子化されウェブ上で公開されたものを挙げることができます。ある種の貴重書や歴史資料、一部の統計などについては、ウェブ上でのみ公開されているものもあります。ウェブ上の二次資料としては、

学術図書・学術誌・学術論文などが電子化され公開されているものがあります。ある種の図書・学術誌には電子媒体でのみ公開されているものもあります。ウェブ上の三次資料についても同様です。ただし、これらの資料を使用するに当たっては、それぞれ一次・二次・三次資料に実際に該当するものであるかどうか確認が必要です。

ウェブ上には、**一次・二次・三次資料に該当しないそれ以外の膨大な情報**が存在します。具体例としては、個人のブログやウェブページ、企業の宣伝ページ、各種法人や団体のページなど、様々です。これらの情報は、基本的には**大学以上のレベルでのプレゼンテーションやレポート、論文の根拠として利用できる信頼性を持っていない**ということに注意してください。

3-5) 不正なネットサービス利用への警告

インターネット上には大学でのレポートや論文に係るサービスが提供されていますが、なかでも**レポート代行業やレポート売買サイト（資料共有サイト）などの不適切なサービスには十分注意してください**。これらのサービスを利用してレポートや論文を作成しても全く評価はされませんし、不正行為と認定される危険性が非常に高いです。

最近では、学生レポート売買サービスを利用して他人が作成したレポートを購入するケースもあるらしいとの噂も伝え聞きます。しかしながら、著者名や発表年、発行者等の基本的情報が不明な資料は信頼性の面からも大学におけるレポートや論文の根拠として全く不適切です。決してこのようなサービスを利用しないでください。

さらにはここ数年、他大学の学生のレポートや課題、あるいは卒論の原文がそのままウェブで公開されているケースも多くなってきました。これら他大学生が作成した資料についても、大学以上のレベルでのプレゼンテーションやレポート、論文の根拠として利用できる程の信頼性を持っていないと考えるべきでしょう。

学生の皆さんがインターネットを検索して見つけ出した資料は、教員も同じようにたどり着けます。**安易な「コピー&ペースト」は決して行わないでください**。

<参考文献>

- ・高知大学『平成30年度学生便覧』。
- ・戸田山和久（2002）『論文の教室』、NHK 出版。
- ・モスカ・マニエラ、パガネッリ・マリア、森直人、「経済思想史における論文の書き方」（<http://manuelamosca.com/Tesi/jap.pdf>、2018年6月20日参照）。
- ・Babbie, Earl, “Plagiarism” (<http://www1.chapman.edu/~babbie/plag00.html>、2018年6月20日参照）。

<この冊子に関するお問い合わせ先>

社会経済学科教務委員会 雨宮 (amemiya@kochi-u.ac.jp)